

看護学教育におけるコア・カリキュラムの展望

宮岡 久子¹⁾

Perspectives on Core-curriculum in Nursing Education

Hisako MIYAOKA¹⁾

I. はじめに

1996年8月の「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」(以下、指定規則)の改正により、看護学教育機関におけるカリキュラム編成の自由裁量枠が拡大された。それにより、各教育機関が独自のカリキュラムを編成することが可能になった反面、カリキュラムを編成する主体によって格差が生じる可能性も否定できない。特に、大学において規制緩和の流れを受け、教育の大綱化のもとに独自のカリキュラムが編成され、多くの看護系大学が設置認可されている。しかし、大学教育を受けた新卒看護師の看護実践能力の低下が問題となり、看護学教育の在り方に関する検討が活発化している。検討内容が示された報告書¹⁾を見ると、学士課程カリキュラムの改善としてコア・カリキュラムが提案されている。しかし、提示されているコア・カリキュラムではコアだけが示されているだけで、周辺となる課程を含めた全体構造については提示されておらず、具体性に欠けた報告書となっている。看護学教育においてコア・カリキュラムを導入するのであれば、コアだけではなく、全体構造を明確にする必要がある。

ところで、今回提案されたコア・カリキュラムは、長い間教科カリキュラムで教育を行ってきた看護学教育では目新しいものであるが、我が国の教育史上、導入された経験をもっている。過去に実践されたコア・カリキュラムはどのような意図で導入され、どのように編成されたのであろうか。それらを明らかにすることができれば、看護学教育においてもコア・カリキュラム編成の手がかりになるのではないだろうか。そうすれば、上記報告書の内容を具体的に進めることが出来、コア・カリキュラム編成に役立つものと思われる。

以上のことから、本稿では教育史上見られたコア・カリキュラムを概観し、看護学教育におけるコア・カリキュラムの方向性について論じる。

II. コア・カリキュラムの概念

1. コア・カリキュラムとは

そもそも、看護学教育の在り方検討会が提案しているコア・カリキュラムとはどのようなカリキュラムなのであろうか。

教育史上、コアの原型は19世紀ドイツにおけるヘルバルト学派による「中心統合法」に由来すると言われている²⁾が、我が国に導入されたコア・カリキュラムは、1930年代にアメリカで開発されたバージニア・プランであった。

このバージニア・プランをモデルにして、我が国においてコア・カリキュラムを戦後発展させたのは、1948年10月に「コア・カリキュラム連盟」を結成した梅根悟や石山脩平である。梅根悟は教育著作集³⁾の中でコア・カリキュラムについて次のように述べている。

これは元来学校の全教育課程を一つのリンゴ、一つの梨にたとえた場合、その中心に、リンゴや梨の核と同じような、中心になる部分を置こうという考えで、この中心になる部分のことをコア・カリキュラムと言うのです。(中略)ところが、世間では、この中核カリキュラムと周辺カリキュラムの二つの部分から成っているカリキュラムの全体を呼ぶのにやはりコア・カリキュラムという言葉を使っているようです。これは実際は「コアのあるカリキュラム」「コアを持ったカリキュラム」とでもいうべきものでありますし、そうしたコアと周辺とから成る新しいカリキュラムのことを統一カリキュラムと呼ん

1) 福島県立医科大学看護学部 応用看護学部門(看護教育学)

key words : core-curriculum, nursing education

キーワード: コア・カリキュラム, 看護学教育

受付日: 2004. 10. 14 受理日: 2004. 12. 1

でいる人もあります。

このように当時は、コアの概念が曖昧なまま使われていたが、現在では「コア・カリキュラムは、生活現実の問題を学習する『中心課程』と、それに必要なかぎりで基礎的な知識や技能を学習する『周辺課程』とから構成されるカリキュラム全体をさし、経験カリキュラムの一つに位置づけられる。」⁴⁾と説明されている。また、金子ら⁵⁾は「民主的な社会人として共通に必要とされる能力を伸ばすことを目的とした、コアのプログラムを共通科目の一部にもち、この共通科目と個人差に応じるために設けられた選択科目とを密接に関連統合させた」カリキュラムであると説明している。要約すると、コア・カリキュラムとは、全体のカリキュラムの中に中心となるコア、つまり核を持ったカリキュラムであり、その核を取り巻く周辺を含んだカリキュラムということであり、コアと周辺課程は有機的な関連を有しているのである。

コア・カリキュラムを編成するときに、何をコアにするかが重要であるが、基本的には問題解決を必要とする生活上の諸問題がコアになり、その問題解決に必要な基本的知識や技能が周辺に配置されるのである。

2. カリキュラムの類型から見たコア・カリキュラムの特徴

カリキュラム編成の本質は、教育内容をどのように組織するかということであり、教育内容の組織方法によって多様なカリキュラムが出来上がるが、一般的に教科カリキュラムと経験カリキュラムに大別される。教科カリキュラムから経験カリキュラムへの移行形態として、教科カリキュラム→相関カリキュラム→融合カリキュラム→広領域カリキュラム→コア・カリキュラム→経験カリキュラムという、いくつかの形態を経る。これらの形態の中でコア・カリキュラムは大別すると経験カリキュラムの範疇に類別されている。しかし、移行形態からも分かるように、コア・カリキュラム＝経験カリキュラムではなく、「コア・カリキュラムのコア（中心課程）は、経験カリキュラムとして構成され、周辺課程は各教科から構成されるのである」⁶⁾。つまり、経験カリキュラムは教科の存在を全く否定するのに対し、コア・カリキュラムは教科カリキュラムの性質を残存しているのである。これは、教育史上カリキュラムの両極である教科カリキュラムと経験カリキュラム（表参照）、それぞれの短所を補うカリキュラムとも言えるのである。具体的に言うならば、教科カリキュラムの弊害、即ち多教科の分立による詰め込みや知識偏重の教育を克服するために提唱された経験カリキュラムの特徴や、系統的な学問体系

を教育内容とする教科カリキュラムの利点をコア・カリキュラムは備えているのである。

Ⅲ. 教育史上に見られるコア・カリキュラム

1. 学校教育におけるコア・カリキュラム

戦後の学校教育において、コア・カリキュラムは東京高等師範学校付属小学校⁷⁾や明石付属小プラン⁸⁾などの報告に見られるように、小学校において盛んであった。しかし、基礎学力の低下や限界が指摘されるようになり、コア・カリキュラムは「三層四領域論」へ発展した⁹⁾が、運営上の困難性も加わり、次第に教科カリキュラムに取って代わられるようになって行った。そして、長い間教科カリキュラムを中心とした教育が行われて来たのである。しかし、最近のカリキュラムに導入された「総合学習」において、教科の枠にとらわれないことや、体験的な活動を重視するという点において、コア・カリキュラムの考えが反映されている、見ることができる。

2. 看護学教育におけるコア・カリキュラム

看護学教育においてこれまでコア・カリキュラムが報告されているのは、筆者の知る限りでは（文献検索の結果も含めて）、わずか三例である。

まず、岡田¹⁰⁾は看護専門学校におけるコア・カリキュラムを報告している。コア・カリキュラムを導入したねらいは、バラバラに教えられている教科を統合することであり、「患者中心の看護」をコアにしている。このように、コア・カリキュラム導入のねらいとコアも明らかであるが、周辺科目がどのようにコアである「患者中心の看護」につながっているかが明確ではない。コア・カリキュラム導入後の評価では、学生が問題に対して系統立てた科学的方法で対処していくようになった反面、学生間の個人差が大きくなった、と報告されている。この報告は1973年に出されているが、当時の看護専門学校におけるカリキュラムは、指定規則による縛りが強く、学校が独自にカリキュラムを編成することは困難であったことから、コア・カリキュラムに挑戦したこと自体が評価されるべきであろう。

次に、大野¹¹⁾の報告は、保健師学校におけるコア・カリキュラムの実践例である。コア・カリキュラム導入の動機は岡田の場合と同様で、教科と実習、理論と実践のつながりが取りにくく、大切なところが遮断されてしまうということからであった。このカリキュラムのねらいは、保健師活動の実践をコアとして、各教科を統合して学ぶことにある。具体的には、コア（中心学習）として公衆衛生看護論と実習および研究を配しており、支持

表 教科カリキュラムと経験カリキュラムの比較

教科カリキュラム	経験カリキュラム
教科に中心がおかれる	学習者に中心がおかれる
教材を教えることに重きをおく	学習者の全人的成長を促進することに重きをおく
教材は学習の場以前に選ばれ、組織される	教材は学習の場で、すべての学習者によって協力的に選ばれ、組織される
教師によってか、または学習の場の外にある、権威を代表する何者かによってコントロールされる	学習の場で学習者によって協力的にコントロールされ、方向づけられる
知識を知識それ自身のために、あるいは将来使うかもしれない必要に備えて事実を教え、情報を与えることに重きをおく	生活の改善に直接に働くような意味をとらえることに重きをおく
個々の習慣や技能を、別々の孤立した学習の側面として教えることに重きをおく	いっそう大きな経験に統合される一部として、習慣や技能をうちたてることに重きをおく
個々の教科の教材を教える方法の改善に重きをおく	学習のプロセスを通して、理解し改善していくことに重きをおく
学習の場に一律な方式で直面させ、できるだけ一律な学習結果を得させることに重きをおく	学習の場に多様な方式で直面させ、期待され習得される結果の多様性に重きをおく
カリキュラムとそれに関連したさまざまな手段によって設定された型式に一致させることを教育と考える	それぞれの学習者を助けて、社会的に創造力のある個性を育成することを教育と考える
学校で授業をうけることを教育と考える	たえざる知的な成長のプロセスを教育と考える

注：金子敏，教育課程の新研究，学芸図書，p219をもとに作成

部門学習（周辺）には、専門的基礎科目と一般教育科目を置いている。コアに研究も置いていることには、多少の疑問も残るが、コアと周辺科目は明確であり、全体的にコア・カリキュラムの本質を備えたカリキュラムであると言えよう。

橋本^{12, 13)}による報告は、学士課程におけるカリキュラムをコア・カリキュラムで編成した実践例である。このカリキュラムにおけるコアは地域保健学である。そして周辺には一般共通分野と選択分野が配置されている。コアが看護学の内容でないのは看護系大学であっても、保健学科という事情からであろう。また、看護師・保健師・助産師や養護教諭などの資格を取得するために必要な科目はすべて選択分野に置かれている。このため、非

看護系学生の卒業必要単位が128単位であるのに対して、看護師および保健師資格取得のための必要単位は164単位にのぼり、さらに助産師資格取得のための必要単位を合わせると175単位にもなることが報告されている。その後、このカリキュラムは改正されているが、コア・カリキュラムのもつ問題点として、開設科目数の増加に伴いカリキュラムの運用が難しいこと、資格取得のための既成法規による縛りが強く、実質的に自由なカリキュラム展開が図りにくいこと、教科間の連携の取りにくいことなどから、多くの問題が残されていることが報告されている。さらに、その後の報告¹⁴⁾を見ると、コア・カリキュラム編成時にコアとなっていた地域保健学は、コアではなく、「カリキュラムの軸」という表現に変わっ

ており、コア・カリキュラムという言葉も用いられてはいない。

看護学教育史上に見られたコア・カリキュラムの実践例は、興味深いことに、いずれも1970年代前半に報告されている。この背景には、1967年11月に看護師教育課程が改正され、さらに1971年には保健師・助産師教育課程が改正されたことが契機となり、カリキュラム編成時に工夫が加えられ、その中で少数ではあるが、コア・カリキュラムが編成された結果と考えられる。しかし、それ以後は指定規則が改正される都度、様々な教育機関によるカリキュラム編成に関する報告が専門雑誌の特集などとして組まれているが、コア・カリキュラムに関する報告は皆無と言ってよい。

Ⅳ. 看護学教育におけるコア・カリキュラムの発展のために

1. コア・カリキュラム編成における困難の克服

看護学教育においてコア・カリキュラムが発展しなかった大きな理由は、長い間我が国において教科カリキュラムが採用されてきたことに起因するであろう。教科カリキュラムは周知のように、教育内容を教科（文化遺産）を中心に組織編成する方法であり、特に高等教育においては学問中心の教科カリキュラムが伝統的に採用されてきた。看護学教育においてもしかりである。したがって、教科カリキュラムは教師にとっても馴染みがあり、編成しやすいという利点がある。しかし、コア・カリキュラムを編成するためには、教科カリキュラムの編成方法のほかに、経験カリキュラムの編成方法も熟知していなければならず、「教師も一般の人もこの方式に慣れていないために、周到な準備を欠くと失敗する危険性を持っている」¹⁵⁾のである。

看護学教育の在り方検討会が提出した報告書において、コア・カリキュラム全体の具体的内容が示されていないのは、カリキュラム編成の困難性にも因るのではないかと推察される。報告書では、看護技術がコアになっている。これは学士課程卒業生の看護実践能力の中でも、特に看護技術に関する能力の低下が指摘されていることから、コアに位置づけられたと報告書から読み取れる。しかし、上述したようにコアを取り巻く周辺にどのような教科を配置するのが示されていない。コア・カリキュラムの編成を具体化するためには、看護基本技術と他の教科がどのように関連しているのか、その構造を明らかにする作業が不可欠である。また、コア・カリキュラム編成上の困難を克服するためには、多くの教員がコア・カリキュラムについて研鑽を深め、検討会の提示した報告書の内容について活発な議論ができる機会が必要であ

ろう。

2. コア・カリキュラム編成の方向性

コア・カリキュラムは、これまで述べてきたように生活上の諸問題を解決することを目指した経験カリキュラムと、学問としての文化遺産を伝えるという教科カリキュラムの両方を備えたカリキュラムであることから、看護学教育においても導入される意義はある、と考える。編成にあたっては十分な検討と準備が必要であるが、現時点における方向性について述べてみたい。

まず、検討会報告で示されたコアをそのまま用いてカリキュラム編成を進めようとするならば、周辺課程に何を配置するかを検討しなければならない。コアと周辺課程の関係は、互いに独立したものではなく、コアのプログラムを共通科目の一部にもち、かつ、学習者のニーズに応ずるために配置される選択科目とを密接に関連させ、統合を図るものでなければならない。したがって、看護基本技術をコアにするならば、周辺課程にも基本技術に関連する技術を置く必要がある。例えば、対象別の技術、あるいは応用技術というものである。対象別の技術としては、母性看護技術、小児看護技術、成人看護技術、老人看護技術、精神看護技術などである。応用技術としては、在宅看護技術などがあるが、報告書の中で基本技術として示されている、a「環境調整技術」からm「安楽確保の技術」の応用も含まれるであろう。周辺課程には、この他に「看護ケア基盤形成の方法」に関連する内容を必須科目として置く必要がある。さらに、学習者の興味・関心に応ずる内容を選択科目として配置することが必要である。

以上が前述した報告書に沿ったコア・カリキュラムの一案であるが、このような技術をコアにしたカリキュラムでは、限界がふたつ考えられる。ひとつはカリキュラムの全体的枠組みが狭くなることであり、もうひとつは、コア・カリキュラム本来の特徴である経験カリキュラムの要素が生かされないことである。そこで、このような限界を打破するために、先に大野が報告したコア・カリキュラムが参考になると思われる。

それはコアに臨地実習、つまり看護の対象である人々の健康上の諸問題を解決する体験、を置くという考え方である。実習はこれまで学んだ知識と技術を統合しながら、対象の問題解決を体験する学習であることから、経験カリキュラムとしての特徴を有し、コアとしての機能を果たすと考えられる。また、実習は、基本的看護技術よりは幅広い機能を持っており、有機的関連を持つ周辺課程も幅広く配置することが可能である。実習のねらいとしては、対象と健康レベルを組み合わせ問題解決を図ることであり、具体的には、個人、家族、地域住民を

対象として、さまざまな健康上の問題解決を体験させる機会を組織することである。そして、周辺課程には、主に専門科目と専門基礎科目（または、専門関連・支持科目）になるものと、学習者の興味・関心や人間形成に関わる一般教養科目（または基礎科目）を選択科目として配置する。コアである実習と周辺課程の関係は、対象と対象の健康について学習し、看護実践のベースとなる関係形成の学習と、対象の問題解決に必要な内容と方法が学習されるようにするのである。さらに、対象を援助していくうえで必要な社会資源の活用について学び、合わせて調整役割や協働（コラボレーション）について学習し、それらを統合することを実習の中で体験していくのである。周辺課程には、この他に助産師などの資格取得を選択する場合に必要な科目を置く必要があろう。しかし、あまり多くの教科を配置すると、橋本の報告に見られたように、教科カリキュラムのような弊害が生じる可能性がある。

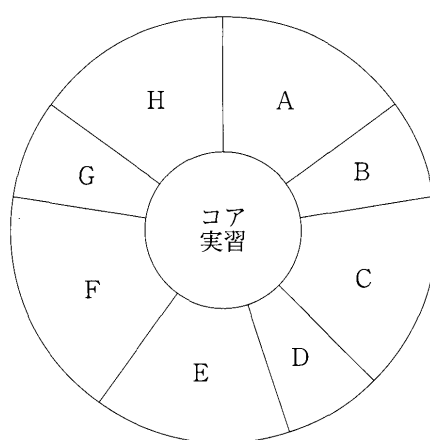
以上が検討会報告書にあったコアとは異なった、実習をコアにしたカリキュラム編成の一案である。この案を具体的に示すと図のようになるが（図参照）、今後さら

に検討し、教育内容を吟味して行く必要があると考えている。

どのようなカリキュラムであっても、各教育機関の理念と、どのような看護職を育成するかという教育目的・目標が根底にあるのは言うまでもないが、看護の実践力を育成し、高めるというコア・カリキュラム導入のねらいが達成できるように、看護教育関係者が先人の知恵を借りながら、さらにカリキュラム編成を進めていく必要がある。

V. おわりに

看護学教育の在り方に関する検討会報告書に提示されているコア・カリキュラムについて、その概念、特徴、史的概観をふまえ、今後の方向性について述べてきた。コア・カリキュラムが看護学教育にどの程度導入されるかは未知数であるが、看護学教育をより良いものにしていくために、コア・カリキュラムについての議論が高まるための一石になればと願っている。



- A：看護の概念、看護の役割・機能を理解するために必要な内容と、看護の将来展望・看護職の発展のために必要な基礎的内容
- B：看護の対象を総合的に理解するために必要な内容
- C：対象の健康（健康障害・健康回復を含む）を理解するために必要な内容
- D：対象との治療の関係形成に必要な内容
- E：対象の看護上、健康上の問題解決を図るために必要な内容
- F：様々な健康レベルにある対象の援助に必要な内容
- G：様々な社会資源活用についての内容と、チーム医療に必要な内容
- H：学生自身の成長・発達を促進し、興味・関心に適合する内容

図 コア・カリキュラムの全体構造（私案）

引用文献

- 1) 看護学教育の在り方に関する検討会報告：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて，看護教育，43(5)，411-431，2002.
- 2) 吉本均編：教授学重要用語300の基礎知識，明治図書，158，1990.
- 3) 梅根悟：梅根悟教育著作選集6，明治図書，24-25，1977.
- 4) 天野正輝編：教育課程重要用語300の基礎知識，明治図書，32，1999.
- 5) 金子孫市他：教育課程の編成，世界書院，61，1965.
- 6) 前掲4)
- 7) 東京高等師範学校附属小学校：コア・カリキュラムの研究，柏書院，1949.
- 8) 兵庫師範女子部附属明石小学校：小学校のコア・カリキュラム 明石小プラン，誠文堂新光社，1949.
- 9) 平野朝久：教育課程，教育の方法と技術，多田俊文，学芸図書出版，25，1997.
- 10) 岡田幸子：本校のカリキュラムの経過と現状－コアカリキュラムの展開－，看護教育，14(10)，638-644，1973.
- 11) 大野絢子：コアカリキュラム実施の動機と教育の進行，保健婦雑誌，28(9)，49-55，1972.
- 12) 橋本秀子：琉球大学保健学部保健学科における看護教育について，保健の科学，15(7)，397-421，1973.
- 13) 橋本秀子：琉球大学保健学部の発展の中から，看護教育，14(11)，704-711，1973.
- 14) 外間邦江，伊敷和枝，左寄千鶴子：琉球大学における看護教育の特徴と教育内容，看護技術，22(6)，30-49，1976.
- 15) 金子敏：教育課程の新研究，学芸図書，223，1974.